

「言葉への意識」を高めるとは

京都教育大学助教授 もりやま 森山 たくろう 卓郎

一 いろいろな「夕陽」——「自分の言葉」ということ

例えば「夕陽」という言葉に触れたとき、人はどのようなことを想うのでしょうか。夕陽ゆうなづかの海を赤く染めつつはるか水平線に沈んでいく夕陽の姿かもしれません。また、ある人は杉木立を金色に染めて山峡の向こう側に沈む夕陽を想うかもしれません。大都會の高層ビルの窓ガラスを思い出したように輝かせながら沈む夕陽を想う人もあることでしょう。イメージだけではありません。夕陽という言葉を知ると、「夕暮れの太陽は日光の照射角度の関係で通過する空気の層が厚くなり、波長の長い赤系統の色になるのだ」、などといった科学的知識をまっさきに思い出す人だっているかもしれません。このように、言葉からの発想は、人それぞれによって違います。これらの例で、どれが間違いなどということはありません。個人にとつて、言葉というものは、それまでの生活経験や思考から習得されるものです。そして、人の生活経験というものが必ず違っている以上、言葉からの発想も人それぞれに違っていて当然なのです。

このように、言葉の経験というものは、つまるところ、個人的なものです。したがって、子どもの成長の中で、まずは「自分の言葉」というものを築いていくことが非常に大切になってくるのです。例えば、「寂しい」という言葉の意味は、単に辞書的に理解されて終わり、というものではなく、自分なりの経験や想像力の中で獲得され、確立されたものであるべきです。「寂しい」という感情を抱いたという経験を待たず、そして、寂しそうにしている人の心をそれなりに想像できるようにもなっていないのであれば、「寂しい」という言葉の意味の本質を本当に理解しているとは言えないはずなのです。

これは文学での読みにもつながります。例えば、「モチモチの木」で、豆太が夜中に医者様呼びにふもとまで走っていく場面がありますが、ただのお話の一節として漫然と読むのと、「霜が足にかみついた。足からは血が出た。」などという叙述の一つ一つを大切に読んで「本当に痛いだろうな、でも、おじいさんのことがとにかく心配でならないのだろうな。」などと思いを込めて読むのでは「読み」の質はだいぶ違ってくると思います。たとえ自分が同じような経験をしていなくても、自分の経験をもとにしつつ、言葉の向こうにあるものを組み立てようとして読むことができれば、この場面の描写も「自分の言葉」として理解されてくるのです。

くるのです。

想像力も含め、生き生きとした「自分の言葉」を確立させていくこと。「言葉に血を通わせる」こと。国語科の究極の目的の一つはこうした点にあるに違いありません。そのためには、多くの「生きた言葉」と出会うこと、そして、毎日の豊かな生活経験を心に留めておくことが必要です。その意味では、国語の授業だけではなく、家庭での会話や遊びの体験も、さまざまな読書も、生きることにすべてが言葉の学習だと言えます（もつとも、正確に言えば言葉の学習の「機会」というべきかもしれません）。家族や友達との会話の量が、テレビの垂れ流しやゲームなどで少なくなっていると聞きますが、ゆゆしいことです。

二 「伝え合う言葉」ということ

さて、「自分の言葉」の確立が大事なのではないか、ということを書きましたが、「自分の言葉」とは身勝手な「私だけの言葉」ということではありません。社会で通用する「言葉である以上、「伝え合えること」が前提だからです。例えば「夕陽」という言葉で、東から昇ってくる朝日のことしか考えないという人があった場合、それはもはや「夕陽」という言葉として、ほかの人には通用しません。逆に、「伝え合う」ことができれば、私たちはほかの人のイメージする「夕陽」を理解したり共感したりすることが出来ます。

このように、「自分の言葉」を持つ基盤として、「言葉が伝え合えるものである」ということをおさえておく必要があります。当然、言葉の使い手として、「伝え合う」ために、文字や表記の学習、語彙ごういの学習などもしっかりしておく必要があります。適切な文体を身につけることも必要でしょう。文法的に文の意味を理解することも大切です。学びの過程にある子どもたちにとって、こうした「基礎」をおさえることは本当に大切なことです。

以前、「動物園の人が肉を持っていました。その肉にはライオンが食べたような跡がついていました。」という文に対して、「動物園の人が持っていた肉はライオンが食べたのですか。」と小学生に聞いてみたことがあります。この場合、論理的な関係としては、「ライオンが食べたかどうか不明」という意味で理解する必要があります（被修飾名詞が「跡」という「証拠」である場合の「AのようなB」においては、「ような」はそ

「言葉への意識」を高めるとは

の「証拠状況」への類似関係を表し、いわゆる状況に関する推量という意味になります。しかし、この調査の結果、小学生ではこの論理関係が正確に把握されているとは言にくいということが分かりました。正答率は、一年生段階ではほぼ二割、三年生ではほぼ五割、五年で六割でしかありませんでした（三学期の調査です）。「ライオンが食べた」といった回答は一年で四割以上、三年でも二割以上ありましたし、「ライオンが食べた肉ではない」と決めつける回答もありました。

言うまでもなく「ようなだ」という形式は、小学生でも無意識に自然に使っている表現です。しかし、その「意味」の理解はいつも完璧（かんぺき）になされているわけではないのです。この例のように、論理的な意味解釈の決定には一定の意味の計算が必要なのです。さらに、実際の言語使用を考えると、文脈状況から適切な解釈を推理することなども必要になってきます。狭いところに立っていて、やってきた人に「通れないよ。」と言われたら、普通は道を開けてくれ、という意味だと解釈して道を譲るはずですが、「そうですか。」などと言うだけでそのまま動かないならもう立派な嫌がらせです。

このように考えると、言葉というものは、情報伝達の「手がかり」と言ってもいいでしょう。言葉の意味を紡ぎ出すことは、単純な自動的記号処理ではなく、さまざまな情報を総合的に利用し、判断することなのです。「手がかり」としての言葉を有効に使いこなすためには、しっかりと「考える」ことが必要なのです。

とりわけ、人間の言語ではさまざまな表現が発達しているわけですから「手がかり」の第一である言葉を意識化することが必要です。このことは、自分の言葉を相対化し、言葉への意識を高めることが必要だということに言い換えてもいいでしょう。「言葉への意識」を高めることを通して、しっかりと「伝え合える言葉」を確立することができれば、本当の意味での「自分の言葉」を確立することができるのだと思います。

三 「言葉への意識」を高めるために

では「言葉への意識」を高めるために、特に国語科の学習において、どのようなことが必要なのでしょう。第一に挙げたいのは、まず言葉を好きになって、言葉に向き合うということです。「おもしろいなあ」とい

う思い、「読んでみたい、書いてみたい、話し合ってみよう」といった思いが、すべての土台です。読む力が十分でないなら、読み聞かせでもいいと思います。「楽しめる」ことは大切な力です。言葉で遊んでみる経験も国語科の重要な要素と言っていいでしょう。例えば、子どもたちがしりとりなどの言葉で遊ぶことも、広い意味での国語の語彙学習です。漢字の学習なども、単に練習・暗記するだけではなく、パズルにして遊んだり、成り立ちなどへの興味を喚起して「楽しむ」ことができればと思います。「北は十偏ではない」ということを字の起源から教えてもらっておもしろかった覚えがあります。言葉というものが好きになることが「国語力」の根本です。

第二に大切なことは、言葉に立ち止まる機会を作ることだと思っています。例えば「ありがとう」という言葉は誰もが知っています。しかし、誰もが、「自分の言葉」として「ありがとう」を本当の意味で「使える」ようになっているかと言えば、案外そうは言えないような気がします。ある子どもに、どういふときに御礼を言うのか、そして、言われなかったら、どんな気持ちになるのか、を立ち止まって考えさせてみたことがあります。それまでは、「ありがとう」という言葉の辞書的な意味は知っていたわけですが、本当に「自分の言葉」として使うことにはなっていないのです。しかし、「ありがとう」というのは大切な言葉なのだ、と立ち止まって考えたことがきっかけになって、いろいろな場面で心のこもった本当の「ありがとう」が言えるようになったと言っていました。言葉に立ち止まってみることは、自分の言葉に血を通わせる機会を持つことにつながります。

言葉というものは、多くの場合、無意識に使うものであって、そのことについて考える機会はありません。しかし、国語科の時間などに、表現の仕方の違い、言葉の意味、言葉の使い方などについて考えると、ちよつと3Dの絵がはつと見えるように、「言葉」というものが見えてきます。国語科という教科はそういう支援ができる、非常に大切な機会ではないかと思っています。子どもたちが「言葉」を大切にすることで、豊かな「伝え合える、自分の言葉」を持つようになつてほしいと強く願っています。「言葉はすべての学びの基礎であるとともに、人生を、深く豊かにする魔法の鍵（かぎ）のようなものだと思います。」